

米欧亜回覧

第39号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集 総務部会

四月全体例会、杉谷先生の講演 好評！ 「現代語訳」 出版祝賀会も大いに盛りあがる

四月の全体例会は、一部の総会の部で年間の事業報告などがあり、二部の講演の部では「現代語訳の出版」に因み「久米邦武の知的背景を探る」をサブ・テーマに、佐賀大学名誉教授の杉谷昭先生から「和魂漢才から和魂洋才へ」のご講演をいただいた。杉谷先生はご高齢にもかかわらず青年?のように若々しく、大テーマをユーモアを交えて講じられ会場はしばし



全体例会 (学術総合センター)

ば笑声に包まれた。(例会詳細は二・三・五頁、講演詳細は四・五頁)

また、続いて催された三部の「出版祝賀会」は、四十数名が参加し会場は満杯の盛況で、水沢周氏の偉業を讃え、同時に本会の「企画出版」を祝って大いに盛り上がった。

現代語訳・米欧回覧実記

反響広がる

五月十一日(水)の読売新聞(夕刊)の文化欄に水沢周氏の「『米欧回覧実記』の現代語訳を終えて」(五段記事)が掲載されたのを魁に、十五日(日)には同紙の橋本五郎編集委員がコラム欄で「米欧回覧実記」を取り上げ、二十二日(日)には毎日新聞が紹介記事を、さらには近々共同通信が水沢周氏のインタビュー記事を全国の地方紙に配信の予定である。また、朝日新聞や毎日新聞の書評欄、公明新聞の紹介記事などの掲載が決まっており、その反響



全体例会で披露された現代語訳 (左)

会受沢 賀を水 祝束る(右) 版花取 出でけ周



は大きく廣がりつつある。なお、会員からの購入も含め、売れ行きも着実に伸張しつつあり、この一石の投ずる波紋のさらなる波及効果に期待したい。

五百旗頭真教授、講演！

七月の全体例会は、十六日(土)午後、日本プレスセンターの十階ホールで開催することになり、講演の部は歴史部会の主催で、神戸大学教授の五百旗頭真教授をお招きすることになった。先生は日本政治外交史がご専門で多くの著書があり現下の政治についてもしばしば注目すべき発言をされている。今回はとくに占領時代の日米関係にお詳しいので憲法改正論議ともからめて、そのあたりのお話いただく予定である。ご期待ください。

憲法談義をやるう！

六月七日(火)、現未来部会では、「憲法談義」をやるうという事になった。関心のある方はふるって参加ください。(詳細は八頁案内)

憲法改正論議がいよいよ盛んになってきた。戦後六十年にしてようやくその段階を迎えたという感じである。思えば、憲法論議がここまで廣く深く関心を集めるのは明治初年以來かもしれない。岩倉使節団首脳第一の関心事も憲法問題だった。よく知られているように木戸と大久保は帰国早々、憲法制定の緊要性を説いた建言書を「正院」に提出している。共に天皇を戴く議院制を主張し、漸進的な近代化を構想した。中でも最も熱心だったのは木戸であり、ワシントンに滞在中アメリカ憲法の研究を始め、その際、久米らにいわれて、「五ヶ条の御誓文」を想起している。それは明治新政府の大方針を明らかにする大文章であり、木戸もその起草にかかわっていたからだ。あらためて五ヶ条を挙げれば次の通りである。

天地ノ公道ニ基クベシ—新憲法論議

泉 三郎

—旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ
—知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ
この文案は、はじめ由利公正(三岡八郎)が起草し、福岡孝弟が修正し、最後に木戸が手を加えて完成したといわれている。由利は福井藩士で藩の政治顧問となった横井小楠の教えを受けており、そこには儒教的共和主義の思想が底流している。村松剛の説では、原案は「列侯會議」となっていたのを「廣ク會議ヲ興シ」とし、「宇内ノ通義ニ従フベシ」としていたのを「天地ノ公道ニ基クベシ」としたのは木戸だという。

この五ヶ条は「皇基」の一字を除けば、今日の世界どこにも通じる普遍的なものであり、平成憲法を論ずる場合にも大いに参考にすべきものだと思う。とりわけ「天地ノ公道」という言葉には人倫はもとより資源や環境問題も含まれており、東洋的な理想が謳われていて高邁である。いまこそ我々は明治創業の原点に立ち返り、先人の知恵を学び直す必要がある。

- 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ
- 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス
- 廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スベシ

第三十六回全体例会 NPO設立後初の 総会を開催

平成十七年度、第一回例会は四月二十三日十三時より一ツ橋の学術総合センター、中会議室において、会員六十三名の出席により開催された。議事は、まず、各分会幹事より十六年度の活動報告が行なわれ、また総務部会より、ビデオ研修会、「岩倉使節団という冒険」合評会などの活動報告がなされた。

続いて、平成十六年度の収支決算書、財産目録の審議に移り、総務部会幹事より説明があった後、満場一致で承認された。詳細は別添資料のとおりで、ご欠席の方々にも改めて確認を頂き、質問又は意見があれば、事務局までお寄せください。今回の決算は、NPO設立後(平成十六年八月二十五日以降)のNPO「米欧亜回覧の会」の収支(別紙)と、それ以前の平成十六年四月一日以降一年分の「米欧亜回覧の会」収支(三頁)を別掲しているので留意してください。また、平成十七年度のNPO「米欧亜回覧の会」事業計画および収支予算も併せて掲載(五頁)している。事業計画および予算は七月例会において説明、承認をいただくこととなります。

平成16年度の活動報告 (平成16年4月～平成17年3月)

	全体例会	実記読心会・英訳読心会	現未来部会	歴史部会	総務部会 (歴史の旅・メディア・その他)	関西支部
2004 4月	32 回例会(4・17) 会員 水澤周氏 「回覧実記精読訳出の旅」	英国 ロンドン(4・8) USA Chapter14(4・15) Northern States 1				ビデオ鑑賞 「京都の美術」 (4・16)
5月		英国 ロンドン(5・13) USA Chapter14-15(5・20) Northern States 1, 2			道南歴史の旅(5・7～10)	
6月		英国 リバプール(6・3) USA Chapter15(6・17) Northern States 2			ニュース 35号(6・15)	
7月	33 回例会(7・3) ゲスト 岡崎久彦氏「現下の 国際情勢と日本の外交」	英国 リバプール(7・8) USA Chapter15-16(7・15) Northern States 2, 3	「新業開発と特許問題」 報告: 西井易穂(会員) (7・7)	全体例会担当(7・3)		「ある通信技手の 手記とITの 黎明」(7・16) 松田裕之氏
8月						
9月		英国 マンチェスター(9・9) USA Chapter16(9・16) Northern States 3			ニュース 36号(9・30)	
10月	34 回例会(10・30) ゲスト 保阪 正康氏 「中国から見た昭和という時代」	英国 マンチェスター(10・7) USA Chapter17(10・21) Washington, D.C.		全体例会担当(10・30) 「私の伊藤博文論」 報告: 石川直義(会員) (10・15)		NHK「グッドバイ ちよんまげ」 視聴(10・14)
11月		英国 グラスゴー(11・4) USA Chapter 17&18 (11・ 18) Washington, D.C. & Philadelphia	「科学技術をめぐる日本の 国際対応」報告 塚本弘 (会員)(11・ 26)			
12月		英国 グラスゴー(12・2) USA Chapter 18(12・16) Philadelphia			ニュース 37号 「冒険」合評会」第一回(1 2・9)	
2005 1月	35 回例会 新年懇親例会 テーマ「オーストリア」 オーストリア駐日大使	英国 エディンバラ(1・13) USA Chapter 18(1・27) Philadelphia				新年会 『福沢諭吉と久 米邦武の比 較』
2月		英国 エディンバラ(2・3) USA Chapter 19(2・17) New York City			ビデオ研修会第一回(2・1 9)	
3月		英国 ハイランド (3・3) USA Chapter 20 (3・17) Boston	「日中関係の未来」 報告 津上俊哉 (3・ 18)		「冒険」合評会第 2 回(3・ 10) ニュース 38号(3・31)	



新入会員の紹介 (全体例会)

また第二部(講演会、詳細は四・五頁)、第三部(水澤周氏の『実記』現代語訳出版を祝う有志の会、於 神保町 新世界菜館)も盛会のうちに開催することが出来た。

なお、事業計画と関連しそれぞれの部会より十七年度の活動計画が提出されている。現未来部会は、六月七日に「憲法問題その一 総論・天皇」をテーマに開催予定の第一回の後、九月、十二月、三月の四回、部会を予定している。また歴史部会は第一回を六月二十二日、永富邦雄氏のレポート「鈴木貫太郎内閣の終戦処理」で開催。実記を読む会、英訳実記を読む会(毎月第三木曜日)、青年部会(次回は六月十日)もそれぞれ日程が決まっているので、関心のある方は事務局又は部会幹事まで連絡ください。

(文責 山田哲司)

平成16年度・収支報告書及び会計財産目録

平成16年度 収支報告

平成16年4月～平成17年3月 米欧亜回覧の会

(単位：円)

収入		支出	
◎前年度よりの繰越	733,507	◎例会および部会関連費用	1,426,095
◎会費	2,326,426	案内郵便費	120,000
年会費	713,426	会場費	1,099,795
例会および部会会費	1,613,000	講師お礼・車代	206,300
◎歴史ツアー	2,436,990	◎歴史ツアー	2,439,643
松前ツアー	2,436,990	松前ツアー	2,439,643
◎賛助金	7,249,300	◎NEWS関連費用	343,050
◎利息収入	55	35～37号印刷代	167,580
		送付郵便代	175,470
		◎出版費	6,500,000
		◎事務局経費	996,124
		電話・通信費	319,352
		会議費	156,034
		事務費	520,738
		◎次年度繰越金	1,041,366
	12,746,278		12,746,278

平成16年度 特定非営利活動にかかる事業 会計財産目録

平成17年3月31日現在 特定非営利活動法人 米欧亜回覧の会

(単位：円)

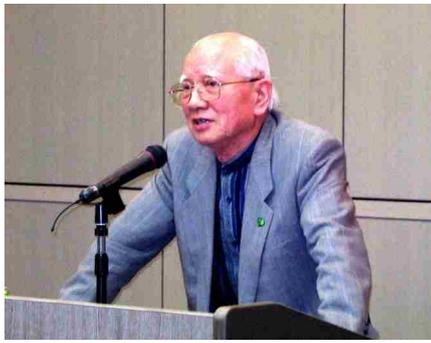
科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金予金		
現金	113,947	
普通預金	464,334	
郵便貯金	463,085	
流動資産合計		1,041,366
2 固定資産		
固定資産合計		0
資産合計		1,041,366
II 負債の部		
1 流動負債		
流動負債合計		0
2 固定負債		
固定負債合計		0
負債合計		0
正味財産		1,041,366

4月例会講演

和魂漢才から和魂洋才へ

—久米邦武の知的背景を中心に—

佐賀大学名誉教授
佐賀城本丸博物館館長 杉谷昭先生



杉谷昭先生の講演

今回の講演は、「現代語訳・米欧回覧実記」の出版に因んで、佐賀より杉谷先生をお招きし、原著者・久米邦武の知的背景を中心に、日本の外来文化摂取の歴史に光を当ててお話をいただくことになった。
先生は、ご高齢(喜寿)にもかかわらず、二時間たっぷり終始立ち姿でご講演をくださり、時に巧みな比喻やユーモアをまじえ、参会者を魅了して大きな拍手を浴びた。
講演の要旨は次の通り。

米欧回覧実記と 和魂漢才

「米欧回覧実記」については、例えば、これは私の知る限り、福沢諭吉の「西洋事情」と並んで幕末維新时期における卓越した

西洋見聞録であり、漢語表現としては最高の美文であって、的確に西洋事情を表現している。「実記」の評価については、芳賀徹東大名誉教授(京都造形芸術大学学長)がとくに比較文化という視点から取り上げて、これを日本の近代紀行文学の金字塔だとしていることは周知のとおりであるが、地理学会でも大変評価されており、自然地理の権威である貝塚教授も、人文地理の権威である西川教授も、この「実記」を教材に使用しておられ、それぞれの著書の中でもしきりに引用されている。それはとりもなおさず、地理学の書としても最高の著作であることを示している。
さて、問題は何故これだけのものが久米に書けたのかであるが、それを探っていくと、結局「和魂漢才」という言葉におちつく。久米はその「和魂漢才」を自家薬籠中のものにしてきたからこそ、あの大記録「実記」を書くことができたのであって、その意味でまず、「和魂漢才とは何か」について少しお話ししたい。
日本が東アジアの一隅にあつ

て中国の文化圏にあつたことはよく知られている事実である。それはいいかえれば漢字文化圏ということになるが、やまとことばしか知らなかった日本人が漢字を摂取して、それを自分のものにしていく過程には大変な苦労があり工夫があつたことを忘れてはならない。その点で、日本人が画期的だつたのは、カタカナの発明である。この五十音の音標文字の採用によって、日本人はやまとことばをやまとことばを漢字で表現することを容易にした。そしてさらには平仮名を発明して併用し、漢語を使う場合は返り点をうっての読み下し文にしたり、ルビを附して読みやすくしたりの工夫をした。
そこには先人の長い長い苦闘の歴史があつたといえる。それは、漢字では五〇〇〇〇字を費やさねば表現できないものを、日本は五十音の音標文字に簡略化し、漢字との組み合わせで表現する方法を開発した。これはまことに見事な発明であり、「和魂漢才」の最たる好例といわねばならない。

漢才から洋才へ、蘭学事始め

江戸時代になってオランダとの交渉が始まると、オランダ語とのつき合いが始まる。その最初の苦闘が杉田玄白らの「解体新書」の翻訳であり、その事情は「蘭学事始め」に詳しい。それはまさに「洋才」をいかに

取り入れるかの最初の試みだつた。そして幕末になると日本人は素早くオランダ語から英語へと方向転換する。その見事な変身ぶりは、福沢諭吉の例でよく知られている。幕末の遣米欧使節団のメンバーの場合も、渡航以前には日誌にオランダ語を使っていたのが、帰港時にはもう英語を使っている、これもその間の事情を如実に物語っている。イロハ五十音と数多の漢字の組み合わせで構成されている日本語が、たつた二十六文字のアルファベットで表現できることは驚きであつた。英語を理解することは焦眉の急となり、各藩で英語の学習が始まつた。

久米邦武の知的背景

さて、久米はそうした日本の文化的伝統、知的遺産の上に生れてくるのだが、現実にはまず影響を受けたのは、父親の久米邦郷である。邦郷は、藩主鍋島直正公のお側頭、つまり秘書官長的役職にあり、また大蔵官僚としても外務官僚としても行政官としても能吏であつた。邦郷は息子の教育に熱心で幼少時よりいろいろの書物を与えたり、当時の百科事典的書物「和漢三才図絵」も与えた。邦武はそれに熱中したり、友人のところでも蘭書の和訳本にも接している。また、邦郷は同僚下僚を集めて自宅で仕事の話をするケースも多く、邦武は自ずから政治や



米欧回覧当時の久米邦武

行政について耳学問をする機会があつた。

また、藩校弘道館では、古賀謹一郎に学んだ。謹一郎の祖父古賀精理は、儒者として「寛政の三博士」に挙げられたほどの人物であり、その長男古賀穀堂は、藩校で教え、直正の藩政改革を助けた政治顧問でもあつた。穀堂は「藩政管見」という意見書において、当時の学問状況を「いまを知らず、日本をしらず、唐のこのみ知り、古のこのみをしるは愚かなり」と痛罵し、今と世界のことを知らなくてはならぬと蘭学をしきりにすすめた。こうした先進的で開明的な師がいたことが久米に大きな影響を与えたと思われる。

それから、邦武は、当代随一といわれた名君、開明君主である鍋島直正(閑叟)に仕えたことが大きい。久米は二十六歳のとき、直正の近侍つまり秘書的調査役になるが、そこで実地に多くのことを学んだ。

直正は幕府や有力大名と姻戚関係が広く、將軍の娘を妻に

娶っていたり、宇和島の伊達とも従兄弟関係にあったり、薩摩の斉彬や福井の春嶽ともつながっている。そこで最新の情報が入りやすく、幕末に派遣された新見使節団には佐賀から七十七名中八名もが参加している。したがって新見使節に随行した藩士から直に報告を受けているし、仙台藩からの派遣で貴重な記録を残した玉虫大夫の航米日誌も佐賀にきていた。むろん福沢の「西洋事情」もみているというので、西洋に対する予備知識はかなりはいつていたものと思われる。

こうした恵まれた知的環境にあったことは邦武にとつて大きかったに違いない。つまり情報面でも最先進藩だった佐賀に生まれ育ち、しかもその情報中枢に近いところに近侍していたことの意味は大きい。

要約すれば、「和魂漢才」から「和魂洋才」へ、日本人の外来文化摂取の歴史的遺産があった上に、さらに佐賀藩の先進的な環境が、久米の知的教養の背後にあったと言つていいと思う、それらが「米欧回覧実記」を書かせた主たる要因ではなかったのか。

尚、その後、質疑応答に入り、佐賀藩士の気質について、過激なところや協調性のない点など、辛口の発言もあって興味深かった。

(文責 泉三郎)

平成17年度の事業計画および予算書

平成17年度 事業計画書

平成17年4月1日から平成18年3月31日まで

特定非営利活動法人 米欧亜回覧の会

1 事業実施の方針

平成17年度は事業の中心を講演会、セミナーの会、歴史ツアーの三本柱とする。

2 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

事業名	事業内容	実施予定日時	実施予定場所	従事者の 予定人数	受益対象者の 範囲及び 予定人数	支出 見込み額 (千円)
講演会	講演会年3回 交流・交歓会年1回	4月、7月、10月 1月	日本プレスセンター	各回8名	一般市民 講演会70名 交流会100名	600 700
セミナーの会	研究及び啓発活動 セミナー年8回	4月、6月、7月 9月、10月、12月 1月、2月	学術総合センター他	各回3名	一般市民 各回25名	250
歴史ツアー	長州歴史ツアー	4月	山口県 下関市、萩市、山口市	3名	一般市民 20名	1500
会報(ニュース)発行	会の活動に関する 会報の発行による研究、啓発活動	季刊(年4回)	—	3名	一般市民 各号800部	328

注) 左記の他平成16年度に引続き「米欧回覧実記」現代語訳企画・制作支援活動を行う他、DVD「岩倉使節の米欧回覧」制作事業(総予算7,500千円)を企画中である。

平成17年度 特定非営利活動にかかる事業 会計収支予算書

平成17年4月1日から平成18年3月31日まで

特定非営利活動法人 米欧亜回覧の会

(単位:円)

科 目	金 額	
I 収入の部		
1 会費・入会金収入		
入会金収入	100,000	
会費収入	750,000	850,000
2 事業収入		
講演会事業収入	1,430,000	
セミナーの会事業収入	300,000	
歴史ツアーの会事業収入	1,500,000	3,230,000
3 寄付金収入		
助成金	3,000,000	
賛助金	4,500,000	7,500,000
当期収入合計(A)		11,580,000
収入合計(A)		11,580,000
II 支出の部		
1 事業費		
講演会事業費	1,300,000	
セミナーの会事業費	250,000	
歴史ツアー事業費	1,500,000	3,050,000
2 ニュース(会報)関連費		
印刷費	200,000	
郵送費	128,000	328,000
3 DVD(岩倉使節の米欧回覧)制作費	7,500,000	7,500,000
4 事務費		
電話通信費	250,000	
会議費	100,000	
事務費	300,000	650,000
当期支出合計(B)		11,528,000
当期収支差額(A)-(B)		52,000
前期繰越収支差額(C)		1,041,366
次期繰越収支差額(A)-(B)+(C)		1,093,366

長州歴史ツアー報告

当日の長州歴史ツアーは三日間とも好天にも恵まれ、当会ならではの素晴らしい内容の旅となった。

第一日、下関では、長府出身の林章氏(会員)が現地案内を買って出、周到な資料も準備して歴史的な場所を案内して下さった。それは、春帆楼、壇ノ浦、四国艦隊との砲台跡、火の山展望台、高杉奇兵隊拳兵の地、国宝の功山寺、長府の街並みなどで、その場所でも聞く林氏の解説は独特の「林節」でもあり、一行はすっかり聞き惚れて、下関が戦略上、海運貿易上、いかに重要かをよく理解できた。

萩では名料亭「常茂恵」で野村市長も加わっての会食があり、その時の話から急遽、明朝、歴史ある明倫館小学校(市



明倫館小学校を参観 (4月14日)

立)を参観することになった。その学校では全校生徒が授業の始まる前に吉田松陰の言葉を毎朝朗唱しているというのだ。翌朝有志十数名が参観に赴いたが、それはまことに感動的なひとときで生涯の思い出に残るものとなった。

萩市の案内は地元元のボランティアガイドによって行われ、松下村塾、博文旧別邸、木戸旧宅などを訪ね、最後に博物館と旧城址を訪ねた。萩はやはり僻地の狭い土地であり、防長二国に押し込められ、萩に居城せよと命じられた毛利藩主と藩士たちの徳川への怨念がわかるような気がした。

山口では、サビエル創建の聖堂、ルネッサンス様式の旧県庁、井上馨の旧宅、七郷の隠棲地、実に美しい瑠璃光寺の五重塔(国宝)、雪舟の庭、そして、夕食時のホテルでは郷土史家の樹下先生のお話を聞いた。それは短い時間のうちに、長州の歴史・地理、山口が何故首府たり得たのか、小京都たりえたのか、何故ここに国宝やサビエルの寺があるのか、を理解するに充分の内容だった。そしてわれわれは、現地を歩き地勢や風土を知り歴史を辿ることで、戦国大名大内氏の盛時に思いを馳せ、山口の歴史的位置を再認識した

実記を読む会報告

連絡 クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093

info@crown-interchange.com

■四月例会

四月からは、西井易穂氏の司会進行で運営している。まずイギリス・ニューカッスルの炭鉱見学の部分を小野氏が朗読して、当時の日本の石炭産業との若干

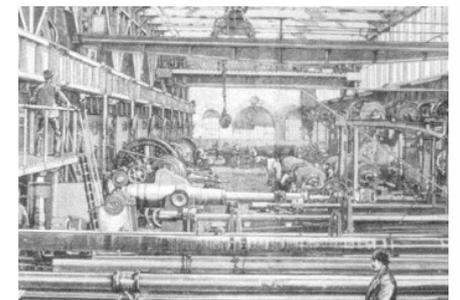
史的考察。更には製鉄業界における、高炉(猛風炉)の発達、転炉(鼓風鐘)製鋼法の発達、銑鉄(生鉄)、鋼(熟鉄、鋼鉄)などの使い分けと久米邦武の表記(カッコ内)の区別に関する考察がなされた。

■五月例会

川島静子氏の朗読のあと、『石炭、昨日・今日・明日』の著作をもつこの道の権威である水沢周氏による『石炭の話』を聴いた。エネルギーの定義から始まりエネルギー資源全体の現状、そもそも石炭とは何か。その分類法や産業革命の中で石炭の果たした役割。石炭産業が抱える労働問題、環境問題、産業災害などへの論述。日本における石炭生産と利用の特質と今後のエネルギーに占める、石炭の可能性とその展望まで述べた。石炭はガス・石油よりはるかにアナログ的であり、石炭新技術はそのアナログ的のものを、いかにデジタル的に使いこなすかにあるという指摘や、ペルーによる開国もとはと云えば、船の燃料としての石炭の補給基地が欲しかったこと、また、久米が「炭鉄の重要性」をよく指摘しながら、鉄については比較的手厚いが、石炭に関する記述が以外に少ないことに疑問を呈した。

の比較を試みた。次いで、アームストロング工場の見学(第三十三巻・二五九頁)に絡めて、鉄鋼技術に憧憬の深い室賀氏に講義をお願いした。アームストロング氏の手柄や日本の叙勲を受けたこと、ベッセマー氏との技術論争、クルップ砲とアームストロング砲との比較や歴史的意義など。更にカメロ会社の鋼錬材製造場(同三〇〇頁)、ベシマ法熟錬煉法並二凶(同三〇二頁)、生鉄熟錬鋼錬ノ弁(同三〇四頁)、同輪軸冶成場(同三〇八頁)、ウイツツカースル社の鋼錬材製造場(同三一六頁―日本はここへ海軍実習生が派遣され、会員正木氏の祖父もその中におられた。三笠・金剛の軍艦もここで建造)の解説のあと、明治時代に使用された国産野砲、ガットリング・ガン(連発、機関銃のへ夢)とその歴

(文) 小野博正



アームストロング氏の鉄鋼工場 (絵図で蘇える「堂々たる日本人」)

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

zaa96087@oak.zero.ad.jp



■四月例会

四月二十一日、十名が参加。

永島氏がアメリカ編最終章を朗読・報告し、一昨年の一月以来二一年四月を要して第一巻アメリカ編を通読。

いよいよ第二巻イギリス編に進み、英国の主要産業たる鉄、石炭、紡績業等を詳述した部分で結構苦労した。特に、鉄鋼の価格と生産量の関係を論じた部分は、経済学に詳しいはずの人達にも容易には理解できなかった。

■五月例会

五月十九日、参加者は七名。第二巻イギリス編Ch.21A General Survey Of The



瑠璃光寺 (4月15日)

のだ。それから光市にある伊藤博文記念館に向かった。ここは日本最初の総理大臣が出た土地としてそれを顕彰しようとの意気込みに燃えており、旧宅とともに立派な別邸(記念館)と博物館があり、曾孫にあたる伊藤博雅氏も同行されたため、末岡市長をはじめ関係者が出迎え、多勢のマスコミの取材もあつて賑やかな視察風景となった。

今回の歴史ツアーは、まさに「日本列島回覧の旅」の一齣であつた。そして現地では各市長さんをはじめガイドの方々、功山寺の和尚さん、各館長さんなどそれぞれに親切にご案内いただき感謝にたえない。そしてこれらはすべて、幹事役の永富邦雄氏の肝煎りによるものであり、その綿密周到な準備と行き届いた配慮のお陰であることを思い、ここから感謝の意を表したい。

なお、この長州旅行の見聞は参加したものだけの専

有にしておくのにはもったいないので、昨年の北海道(道南)旅行に倣つて記念文集をつくることになった。

オーストリー、スイス 歴史ツアーについて



「ブルーアーヴ」(『実用ウィーン』ウテ記)

今年の海外旅行計画については、すでに、オーストリー、スイスを中心に検討中であることを報告しているが、このたび左記計画により具体的な詳細日程調整に入った。

予算削減のため、旅程全体をバスツアーとし、宿泊地は郊外のリゾートなブルンベルの宿とする案なども検討したい。

○期間
九月十日、日本発、九月十九日帰国、八泊十日

○主な訪問地
ウィーン、インスブルック、ルツェルン、ベルン、ジュネーブ

○概算費用
四十万円前後の見込み

尚、参加希望者は数を予め知りたいので、仮申し込みの形で事務局まで知らせて下さい。

Country Of Britain 部分を岩崎、井出、新倉の三人が報告した。我々の翻訳に怪しいところが相変わらず少なくないが、今回は出たばかりの水澤周氏の現代語訳も利用し、「実記探偵団」はますます忙しくなる気配。

井出氏が英国の貿易構造や世界のGDP推移等についての詳細なリサーチを披露した。とりわけ、イギリスの貿易が、かつての豪州、米州依存体質から、近年は様変わりになり欧州依存に変化しEU加盟が必然だったことや、紀元一〇〇〇年当時インド・中国を中心とするアジアが世界GDPの七割も占めていたことを中心に、歴史のうねりを判りやすく解説し、実記を読む面白さが倍増した。

(文) 岩崎洋三

青年部会(仮称)報告 連絡 山本 陽子



mase@yhb.att.ne.jp

記念すべき「第一回小セミナー」に続き「第一回『米欧回覧実記』の現代語訳を読む会」が開催された。シニア会員(?) オブザーバー参加も多く、両会とも大盛会のスタートとなった。

■第一回 小セミナー
既報の通り、泉三郎氏に

「岩倉使節団の人選―大使副使はじめ団員はどのような経緯で選ばれたか」という演題で講演いただいた。使節団派遣決定の背景、団員の人選、使節団の特徴などについて、短い時間ながら非常に興味深い話を伺うことができた。参加者一同、団員各人の目的意識や使命感について感銘を受け、今後追求したいテーマも多く出された。

■第一回 米欧回覧実記の現代語訳を読む会

『米欧回覧実記』の内容を知り、米欧回覧の会の諸活動に参加するための予備知識を養うことを目的とした本会の第一回は、現代語訳を執筆された水澤周先生も参加下さり、五月十三日(金)二十時より恵比寿の備屋珈琲店にて行われた。「サンフランシスコの記 上・下」を参加者全員で講読、適宜該当箇所の原文の音読も行い、また、歴史的な背景や言葉の意味などについてはおブザーバーの方々にも解説をお願いした。小セミナーでのテーマにつながる議論もなされ、またたく間の二時間となった。

(文) 岡松 暁子



現代語訳のパンフレット

関西支部報告

連絡 北村 彰一



shou1@f7.dion.ne.jp

■例会報告
会場の都合で日程変更した四月二十八日、十二名が参加して開催。山崎氏より前回著書を紹介した兵庫県立大学の滝井氏が七月には見えること、実記の現代語訳が出来たことなど連絡事項があつた。

九十九頁より輪読。大陸横断鉄道の完成は一行の通る僅か三年前、それまでパナマ経由の海上輸送が利用された。三十年はあつたという間だけ、社会の変化は随分大きい。桑港は商品が外部よりの到来が多い事が特徴である。桑港にとつてニューヨークよりも横浜、長崎、上海、香港が重要で我々は反省すべきだと『実記』は言う。カリフォルニア州は六十四万平方キロで日本全土よりはるかに広大である。米領になるまでの経緯を読む。買収は良策との声があつた。

松田裕之氏から甲子園大学紀要に書かれた『明治維新とニューメヂア』米欧回覧実記にみる黎明について紹介と説明があつた。

(文) 北村 彰一

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会員 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回くらい全体例会をもちます。

部会 テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役員 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員(年会費3,000円)の特典もあります。

事務局 「イズミ・オフィス」に置きます。
〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。

なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会



.....ホームページのご案内.....

◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー など

* 皆様のご意見をお聞かせ下さい

<http://www.iwakura-mission.jp>

<催し案内>

2005年6月～7月の予定です

☆第37回全体例会

日時：7月16日(土) 13:30～17:00

場所：プレスセンターホール(内幸町)

内容：一部；例会 13:30～14:45

二部；講演 15:00～17:00

五百旗頭真先生(神戸大学教授)

会費：3000円(一部、二部)

☆実記を読む会

日時：6月9日(木)、7月7日(木)

場所：南青山クラウンインターチェンジ内サロン

電話 03-5469-2090

☆英訳実記を読む会

日時：6月16日(木) 18:30～21:00

場所：財)統計研究会会議室

港区新橋1-18-16 日本生命ビル7階

電話 03-3591-8496

世話人 岩崎洋三 zaa96087@oak.zero.ad.jp

☆現未来部会

日時：6月7日(火) 18:30～21:00

場所：ジェトロ5階会議室(港区赤坂1-12-32)

電話 03-3582-5376(秘書室)

テーマ：憲法問題を考える

会費：1000円

☆歴史部会

日時：6月23日(木) 18:30～21:00

場所：日本工業倶楽部会議室(丸の内)

テーマ：鈴木貫太郎内閣の終戦処理(永富邦雄氏)

会費：1500円

☆青年部会 第2回小セミナー

日時：6月10日(金) 20:00～22:00

講演：石川直義氏「木戸孝允と長州の人間教育」

場所：備屋珈琲店 貴賓室WEST(予定)

JR恵比寿東口駅前 電話 03-5488-1651

世話人 山本陽子 mase@yhb.att.ne.jp

☆関西支部例会

日時：7月28日(木)

編集後記

◇NPO法人化後初の総会となる四月例会の記事を掲載する今号を、前号から二ヶ月後にお届けすることができ、このところ常態化していた発行日の遅れを挽回することができました。再び遅れることがないようにしたいと思えます。

◇前号(三十八号)は、編集が年度末の忙しい時期に重なったとはいえ、複数の重大なミスがありました。一頁から四月例会で講師にお招きした杉谷先生の大学名を取り違え、期待の青年部会、第二回小セミナーの日付(八頁)や世話人の岡松さんの名前を誤記(四頁)してしまいました。お詫びいたします。
◇NPO法人化後もホームページは旧来のままになっていましたが、ようやく小委員会を開催し、改編・改良に着手することになりました。ご期待ください。
◇事務局体制強化の必要性を痛感している間に、着々と準備が整えられていた『実記』現代語訳の刊行が実現しました。多くの会員や一般の方が申し込まれ、早くも英訳実記を読む会や青年部会で活用されています。手にする重みを感じます。(N)